

あなたのためにイエスが

奨励	今井 このみ [いまい・このみ]
奨励者紹介	日本キリスト教団希望ヶ丘教会伝道師

すると、ある律法の専門家が立ち上がり、イエスを試そうとして言った。「先生、何をしたら、永遠の命を受け継ぐことができるでしょうか。」イエスが、「律法には何と書いてあるか。あなたはそれをどう読んでいるか」と言われると、彼は答えた。『「心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい、また、隣人を自分のように愛しなさい」とあります。』イエスは言われた。「正しい答えだ。それを実行しなさい。そうすれば命が得られる。」しかし、彼は自分を正当化しようとして、「では、わたしの隣人とはだれですか」と言った。イエスはお答えになった。「ある人がエルサレムからエリコへ下って行く途中、追いはぎに襲われた。追いはぎはその人の服をはぎ取り、殴りつけ、半殺しにしたまま立ち去った。ある祭司がたまたまその道を下って来たが、その人を見ると、道の向こう側を通って行った。同じように、レビ人もその場所にやって来たが、その人を見ると、道の向こう側を通って行った。ところが、旅をしていたあるサマリア人は、そばに来ると、その人を見て憐れに思い、近寄って傷に油とぶどう酒を注ぎ、包帯をして、自分のろばに乗せ、宿屋に連れて行って介抱した。そして、翌日になると、デナリオン銀貨二枚を取り出し、宿屋の主人に渡して言った。『この人を介抱してください。費用がもったかかったら、帰りがけに払います。』さて、あなたはこの三人の中で、だれが追いはぎに襲われた人の隣人になったと思うか。」律法の専門家は言った。「その人を助けた人です。」そこで、イエスは言われた。「行って、あなたも同じようにしなさい。」

(ルカによる福音書 10章25—37節)

スクールカースト
という組織

どことなく、今の環境がしっくりこない。できれば、今の環境から抜け出したい。そんな風に思ったことはありませんか。自分が願っている人生とズレているために悶々とする。大学生になったら、いろいろと経験しているうちに得意なことや好きなこと、趣味が見つかると思っていたのに未だに見つからない。あるいは、好きなことを一生懸命やっていたのに、勉強を頑張っていたのに、就職活動の面接官にはそれを認めてもらえない。大して頑張っていなかったように見えていた子が、すんなり受かっていたりするのを見ると、私の今の人生って何だったのだらうと思う。いろいろとありますね。

最近放送されたドラマで『35歳の高校生』というものがありました。ご覧になった方はおられますか。私は、あのドラマで初めて「スクールカースト」というものが存在することを知りました。いや、実際にそういう組織が存在するのは経験して知っていたけれども、それに名前があるとは知らなかった、というのが本当です。スクールカーストとは、クラス全員が3グループほどに分けられます。第1グループは、クラスを動かしていくリーダー的な存在。悪く言えば、何をやっても許される人たちです。第2グループは、リーダーでもなければ何か言われることもない。誰かの粗相で自分が第1グループに上がれる可能性もあるし、自分がヘマをしたら逆に第3グループに落ちてしまう可能性もある。この第2グループに所属する多くの子がクラスの傍観者です。第3グループは、第1グループのおもちゃ的存在。何をされるかわからない。第1グループにいる人たちに口答えしようものなら、さらに酷いことをされてしまう。毎日、できるだけ目立たないようにいようと静かに過ごしている人たちです。

テレビでは、誰がどの順位にいるのか、どのグループに所属しているのか、ネット上で随時アップされていた。現実にも、ネット上でそのような物が存在しているのかどうか私は知りませんが、グループ分け、そして第1グループがクラスを動かしていく、という構造は実際にあったな、と私自身の過去を振り返ってみて思ったのでした。

第1グループはクラス内での影響力が大きく、その人たちに嫌われるとクラス内での嫌われ者、グループからはみ出てしまった子というレッテルが貼られる。グループから外れてしまうと、グループ学習や遠足、文化祭の準備などでハブられてしまう。いや、普段の学校生活を送るだけでもけっこう辛いかもしれません。休み時間などがくるときに孤独感を味わわなければならない。そうなってしまうと、もうこの先の1年間、もしかししたら中学の3年間、高校の3年間、楽しい学校生活は送れなくなってしまいかもしれない。

こういうことは、中学生・高校生に限ったことではありません。大学生活を送っているなかでもあることでしょう。ゼミやサークル活動、アルバイト先などが集まる所だと大抵同じことが起こります。そして、そういう所に身を置いている限り、先ほどの話のように孤独感をできるだけ感じなくてすむように周りの空気を読んで行動するのです。社会に出て仕事についたときには、孤独感なんてものではなく、仕事を失わないために必然と空気を読まなければならない、なんてこともあるかもしれません。

中学校でも高校でも大学でも、社会人になっても、私たちは常に周りの空気を読みながら生活しています。人間関係がいつも良好であれば、空気を読むといっても、信頼関係が構築されていますからさほど神経を使わなくてもよいですし、ときにハメを外した言動をしても許されます。でも、人間関係が上手くいっていなかったら、何かに脅えながら空気を読まなければならない。大人数の場に身を置いていたら、たとえばスクールカーストで話したときのような、一部のグループの考えが何でもまかり通ってしまうような所に身を置いていたら、一言一句気を使わなければならないのです。毎日、そんなことをしていたら身も心も疲れてしまいます。

イエスの譬え話を
今に置き換えると・・・

今日の聖書箇所に出てきた追いはぎに襲われた人。この人も、社会に、周りの人たちに、傷をつけられてしんどい思い、苦しい思いをしている人です。追いはぎに襲われたこの人は、エルサレムからエリコへ向かおうとしていました。彼が通ったとされる道は、追いはぎが出ることで有名でした。この道を通るときは、複数で通るか、お金を払って自分の身を守ってもらって通るのが暗黙の了解だったようです。でも、彼は一人で通ったのでした。それはなぜでしょうか。おそらく、彼はどうしてもその道を通らなければならない状況であり、また一緒にいてきてくれる人もおらず、自分の身を守ってもらうために払うお金も持っていなかったのでしょう。なかなかグループから抜け出せない、簡単に仕事を辞めるなんてできない、今の自分の環境を変えることができない、そんな私たちと似ています。

逃げたくても逃げることができない。避けられない状況に身を置き、案の定、彼は襲われて倒れてしまった。その隣を、祭司やレビ人が通るけれども、誰も助けてくれません。彼らは、倒れている人がいると分かっていながら、一度目をおいているのに、無視してしまいます。倒れている人を助けることで、倒れている人はおとりでもしかししたら背後から自分が襲われる可能性があるし、助けることでもしかししたら、相手の血に触れてしまうかもしれません。もし、血を流している人に触れた場合は汚れてしまうと考えられているため、何日も清めの期間が必要だという規則がありました。自分が汚れたもの、罪人とされるのは、やはり嫌ですから横目で気になりつつも、素通りしてしまうのです。ユダヤ教の祭司や、ユダヤ教の儀式を担っているレビ人さえ、皆、自分の身を守りたいから、倒れている人がいると知っていても助けないのです。

助けたのは誰かと言うとサマリア人です。たまたま通りかかったと考えられることが多いですが、彼は追いはぎに襲われた人の隣人になるために、やって来たのです。傷を癒すためのぶどう酒、患部を保護するための包帯。すべて持っています。また、宿屋にも一緒に泊まっていますから、夜通し介抱していたことも分かります。旅行するときに、皆さんは荷物にわざわざ消毒液や包帯を持っていますか。見ず知らずの人の手当をするために、一泊ホテルに泊まりますか。彼は、倒れた人、人びとからなかなか手を差し伸べてもらえない人の傍にいたために、やって来たのです。イエスは、自分自身のことを、このサマリア人に譬えて話されたのでした。

イエスの働き

イエスは、いつも助けを必要としている人の元へ出かけています。友だちがいなくて寂しい思いをしているザアカイや、兄弟をなくして、辛い思いをしているマルタやマリアの所。また、重い皮膚病を患っているため、見た目も綺麗とは言えず誰からも近寄ってもらえない人。誰か一人でも傍にいてくれたら、心強いのに。自分の気持ちを吐き出せる、私の話を聞いてくれる人が一人でもいたなら・・・そんな風に思っている人たちです。イエスは、悩んでいた、苦しんでいた、寂しい思いをしている人たちの傍に来てくれる方なのです。私たちが、どうしてもない状況にいて、苦しんでいた、悩んでいた、泣いていた、そうしているときに、必ずイエスが傍に来て、話を聞いてくださる。そんな方なのです。

イエスは、すぐに私たちが悩んでいる環境、状況を解決してくれるわけではありません。でも、自分が抱えている悶々とした気持ちを分かってくれる人がいたら・・・理解してくれる人がいたら・・・気持ちが少し楽になるかもしれません。そして、社会の荒波に吞まれてしまって、もう動けないというとき。たとえば、いじめられてもう死にたいと思ったとき。上司の失敗をなすりつけられて、酷い目にあったとき。そっと、傍に来てくれる人がいたら、踏み込めなくなった心や、踏み込めなくなったように感じると思いませんか。私たちの心をそっと支えてくださるのが良きサマリア人に譬えたイエスの姿なのです。

イエスは、私たちのために傍に来てくれます。でも、イエスが来てくれたから、それで「良かった。ありがとう」。はい、終わり。ではありません。イエスは、「永遠の命を得るには、どうしたらよいですか」との質問に、「あなたも、行って、サマリア人と同じようにしなさい」と答えました。「永遠の命」は、生きていくための「希望」であったり、いつまでも心に残る「温かいもの」「愛」です。それをもつようになるためには、私たちに「あなたも同じようにしなさい」と言われます。

私たちもイエスに倣って

しかしながら、私たちはサマリア人のように誰かを助けるための消毒液や包帯を持ち歩いてはいないし、誰かをホテルに泊めるためのお金もありません。彼と同じようなことをしようと思うと、何か役に立つようなものを持っていないといけないうか。そうだとすると、荷が重いしなんだか大変そうです。

でも、さきほど「辛いときに、イエスが傍に来てくれたら、ちょっと心が救われる気がする」と言いました。イエスは、何か大きく物事を変えてくれるわけではない。でも、傍に来てくれる。私たちも同じことをしたらよいのです。何か物をあげたり、何か気の利いたことを言うのが大事なのではなく、「傍にいてあげること」こそが、倒れている人が最も必要としていること。心が潰れそうになっている人・涙している人・孤独を感じて思い詰めている人たちが求めていることなのです。

私たちが辛いときには、イエスが傍に来てくれる。この希望を、温かさを、愛を、私たちはもっています。そのイエスへの感謝の気持ちをもって、今度は私たちが悲しい顔をしている友だちのために「傍にいる」ことをする。何か面白い話をしたり高価な物をプレゼントしたり複雑なことではできなくても、ただ「傍にいる」だけならできそうな気がします。イエスのように、そっと出かけて行って傍にいることをしてみてください。きっと、温かい気持ちにお互いが包まれることでしょう。

2013年7月17日 京田辺水曜チャペル・アワー「奨励」記録